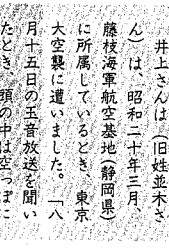
航空廠出張と東京大空襲 その時私は

井上　清（新栄町）



井上さんは（旧姓並木さん）は、昭和二十年三月、藤枝海軍航空基地（静岡県）に所属しているとき、東京大空襲に遭いました。「八月十五日の玉音放送を聞いたとき、頭の中は空っぽになりました。今の若い人たちには、平和のために自分で何をしなければならないか考えてほしいですね」と、戦時中の写真に目をやりながら話しています。

昭和二十年、藤枝海軍航空基地内飛行科倉庫は、零式戦闘機の取替部品及び用品機材の不足が続いていた。長引く戦争で需要は増加、供給は減少の図式が慢性化していたのである。

◇調達に出かけて◇

三月七日、出張員四人は横須賀海軍工廠（注①）、八日に木更津海軍航空廠（注②）へ精力的に要求交渉を行ったが、回答はいずれも不調に終わった。士官二人は藤枝基地へ戻り、九日に飛行科倉庫長と庫員の私は、土浦海軍航空廠へ備品調達に出かけた。その際、粘った甲斐あってか、五〇％は確約することができた。ホッと休憩室で一服したのも束の間、監視所のサイレンは敵機来襲を告げた。その時、米軍機の波状攻撃は凄まじく、廠内は直撃弾の爆りで炎の海と化した。

私達は一目散に避難伏せの姿勢で九死に一生を得た。倉庫長は翌十日正午に木更津海軍航空基地で合流することを約束して、私に休みを与えた。私は東京下北沢小針のおばさんの家を訪れたが、一家は突然の招かざる私を心温かく迎え入れてくれた。その夜は久々に畳の感触と布団の寝心地のよさに感謝した。

◇帝都は紅蓮の炎に◇

真夜中に「並木さん大変だよ。大空襲警報だよ」のおばさんの剛高い声に飛び起きた。暗闇の中で軍服を着装した。この家の主人は「東京中心部あたりが炎上している」と咳込むように言った。屋外の丘から見下ろした所はすでに火の海のようだった。帝都はやられていると認識した。爆弾や焼夷弾を大量に投下中で、「ドカン、ズシン」と鈍い音が間断なく聞こえてきた。紅蓮の炎は天をも焦がす勢いで舞い上がる。三月十日未明の米軍戦略爆撃機の大空襲は、今でも鮮明に甦る。まさにこの世の地獄を見て、破壊されゆくものに不安はつのるばかり、為す術もなく茫然自失、人々の貌は変わっている。

そんな中で、私はすぐ夜が明けたら木更津へ向かおうと決める。おばさんはお別れの際「おむすびよ」と包みを手渡してくれた。当時はお米は配給制で、貴重品同様だったが、心のこもった包みに〝死すとも忘れじ〟と思った。下北沢駅から電車に乗り、都心の運転規制区域で下車して眺める焼け野原の現実は、心の臓を抉られる思いであった。

◇ひたすら歩く現実◇

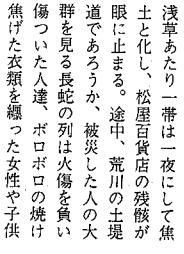
都民総てが絶望している中、私は帝都を横断しようと決め、目標を一応市川駅として鉄道線路に沿って遮に無に歩きました。浅草あたり一帯は一夜にして焦土と化し、松屋百貨店の残骸が眼に止まる。途中、荒川の土堤道であろうか、被災した人の大群を見る長蛇の列は火傷を負い傷ついた人達、ボロボロの焼け焦げた衣類を纏った女性や子供達はこれより先いずこへ避難するのだろうか、疼くように遅々と歩む。

被災して亡くなられた方の御冥福を祈念しながら、〝戦争は残骸の極み、殺されてたまるか〟と心の中で叫ぶ。とある国鉄駅で間引き運転が開始されていた。超満員列車に乗り込み、無我のうちに辿り着いた木更津海軍航空基地衛門は夜の帳の中であった。外敵と闘い、自己矛盾とも闘っていた群像の一兵士軍服は、汗と焦土の爆りが臭い。時に二十二歳と十一か月であった。

―――＊―――

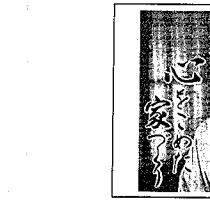
（注）

①航空廠　航空工場のことをいい、ここで航空部品の修理や調達などを行っていた。



戦時中の井上さん（昭和20年3月）

お買物、ご用命は市内で



住む人を優しく包みこむイシカワの家。

時代は今 高耐久住宅

住む人を優しく包みこむ――。そのためには、一人ひとりの個性や土地条件、経済条件などを踏まえたうえで一棟一棟自由に設計した家でなければ、一生住める理想の住宅とは言えません。構造体から設備まで、ハイグレードな内容を標準仕様の中にいかに低価格で盛り込むか。当社の標準仕様をご覧いただければ、その素晴らしさがきっとお分かりいただけると思います。新築・増改築・改装工事・住宅の事なら何でも請賜ります。皆さまの住まいづくりのご相談を、心よりお待ち申しあげております。

長期事務3-1245・東証第二部 5 1987号　全国宅地建物取引業保証協会会員

ISHIKAWA　株式会社イシカワ（旧社名　石川組）

●本社／〒956 新津市大蔵738－1

〔0250－22－2000

兵隊

阿部　実（古田）

阿部さんは、昭和十四年に鉄道六連隊に入隊し、北支那（現在の中国）とフィリピンへ渡り、同十九年には、鉄道七連隊の「員として」ビルマ（現在のミャンマー）へ出向き、軍輸鉄道の建設や警備にあたりました。

終戦後一年近くにわたり抑留生活を送り、無事帰国。それからは鉄道の機関士として活躍しました。「戦争を知らない人は、ただ知らないで済ませるのではなく、過去の歴史を学ぶ姿勢を持ち、行動してほしいです」と話しています。

※阿部さんは、戦争にまつわる思い出や体験を短歌で表現しました。

○北支那にて

日の丸に寄せ書きをしてその旗を肩よりかけて入営をする
国のため陛下のためと教えられ大きな声で五ケ条を言う
ヒシヒシと包囲を狭め八路軍が太行山脈の彼方よりくる
遮らせる鉄条網を乗り越えて手りゅう弾を投げ込みてくる
遺棄死体谷に転がり風に乗る屍臭漂う赤土山に

○フィリピンにて

宣戦の大詔を聞く船艙に裸電球が揺れつつ灯る
船団は錨おろせり遠浅の中部ルソンの海の入り江に
青空に椰子の突き立つ海岸に死体が浮きて流れ着きたり
大砲が地に響きをたて次々に運ばれて行くバタアン（注①）を目指し
炎天の焼け付く熱さ捕虜の列が長々と行くバタアンの道を

○泰緬にて

泰緬（注②）は雨季の雨降る濡れながら捕虜も兵隊も労務者もいる
国体の護持を言われて密林に命令のまま降伏をする
陽が燃えて地平に揺れる渡河点に荷役するなり蟻のごとくに
抑留の長き日続きあるときは逃亡をする企てもでる
アメリカの上陸用の舟艇に積み込まれ今異国離れる

（注）

①バタアン　フィリピンのバタアン半島。当時米軍がバタアンに要塞を築くと、ここへ日本軍が攻めていった。バタアン死の行進として知られている。

②泰緬（タイメン）　タイとビルマ（現在のミャンマー）をいう。

戦争50年・写真展にご協力ください

市では、「戦後50年・写真が語る私たちのまち新津」に出展していただく写真を募集しています。

この写真展は、戦中・戦後の新津のまちの様子や人々の生活ぶり、出来事などを撮った写真を市民の方からも提供していただき、展示することで、一つの歴史や時代を次の世代に伝えていこうというものです。皆さんのご協力をお願いします。

□写真展開催日　10月15日（日）

□ところ　市民会館大ホール

□写真の内容　戦中・戦後の新津のまちの様子や市民の生活ぶり、出来事を撮ったもの

□展示方法　時代やテーマごとに四ツ切りパネルにして展示します。

□応募方法　撮影日、撮影場所、写真の内容を明記して、写真のネガ（ネガがない場合は写真）を送ってください。お借りしたものは、写真展終了後返却します。なお、必要に応じて提供者に写真の内容についてお話をうかがうことがあります。

□応募先　9月22日（金）までに、新津市企画調整課広報秘書係（〒956　新津市程島2009番地、☎24－2111、内線331）へ。

戦争体験手記を読んでの感想などをお寄せください。

・送付先　新津市企画調整課広報秘書係（〒956新津市程島2009番地、☎24－2111、内線331）へ。

お買物、ご用命は市内で

花キューピット　花に託して心を贈る　全国どこにでもお届けします

小林生花店

新町1丁目　TEL 22－1080　22－5707（夜）

〈洋食の店　キッチンK〉

9月の定休日

4・10・11・18・25（月）（第2日）（月）（月）（月）

KITCHEN キッチン K

本町2丁目イザワくつ店横　TEL 24－5420